

Archive&Report

Program

5

<価値を作る>

11.11 (土) 9:00-15:00

五城目を博物館に見立てるなら

浅利絵里子 (秋田県立博物館)

藤 浩志 (美術家・秋田公立美術大学副学長)

レポート

通期受講者 宮原葉月

秋田公立美術大学(新屋大川町)が、アートマネジメントができる人材の育成を目的に展開するアートプロジェクト「AKIBI plus」のひとつ、五城目の第5回目のプログラムが11月11日に同地で開催された。この日のテーマは、講師の秋田県立博物館の浅利絵里子さんと同大学副学長の藤浩志さんによる「五城目を博物館に見立てるなら」。参加者が急遽調査員となり、五城目の町に出掛け、聞き取りなどの調査をする内容だ。

参加者は午前9時に会場のアートギャラリー「ものかたり」に集合し、浅利さんより「五城目はまもなくダムに沈んでしまう。沈む前の短時間で、町で残すべきものを調査員として調べてきてほしい」という設定の説明を受ける。そして「調査するときには自分の感性を最大限に開いて感じてほしい」、「記録する方法として、音をレコーダーで録音したり、街並みを写真で写したり、文章で記録したりする手法がある」とアドバイスも。参加者は3～4人のグループに分かれ、薬局や古道具屋、商店やお寺など事前に調査先候補が記された地図を渡され、グループ毎に調査に出発した。



調査を終えた参加者は午前11時半に同会場に再び集合し、グループ毎に調査発表が行われた。発表を聞いた浅利さんと藤さんは「五城目には日常の中に普通に美術品があり、業者に美術品が狙われる状況が秋田全体の問題としてある。美術館での引き取りが難しい為、美術品の継承者が不在の場合、それらが失われてしまう恐れがある」、「過去にシュバイツァー博士の助手を務めた五城目在住の夫妻のような、情熱的に話をする語り手の存在は貴重」、「高性寺の大根の絵馬のように、『おもしろい』

Archive&Report

Program

5

<価値を作る>

11.11 (土) 9:00-15:00

五城目を博物館に見立てるなら

浅利絵里子 (秋田県立博物館)

藤 浩志 (美術家・秋田公立美術大学副学長)

レポート

通期受講者 宮原葉月

や『エロイ』など調査員によって見方に違いがあることを念頭にいった方がよい』など話した。また総評として、今ある風景や価値はこれから古くなり失われていく恐れがある為、「今回のように調査し聞き取った話を広げていってほしい、感じたことをどんどんシェアしてほしい」、「町に住む者として、残したいものについて記録をつけてほしい」と話す。

午後は同会場で浅利さんと藤さんによる「未来の文化財を見つけに行こう」という講演会が行われた。浅利さんから博物館の機能「収集・保存」、「展示(教育・活動)」、「調査・研究」などの講義を受けた。また文化財のうち民族文化財についても触れられ、まだ登録されていない手つかずの貴重な資料がたくさんあると説明。

藤さんからは「新しい骨董」という、美術家の山下陽光さんらによる実践が紹介された。「今の時代は50年後、100年後どうなっているだろうか。ツイッターでのつぶやきやスパムメールを収集しておいた場合、それらは50年後に骨董になっているかもしれない」との事。

そして町全体を博物館化していくという、1970～80年代に始まった「フィールドミュージアム」という概念が紹介された。美術館の学芸員に相当する存在として、分類・記録・展示・解説を担当する町の調査員が挙げられた。また最近美術館で注目されている「コミュニケーター」という、調査員に必要な専門知識が不要の、訪れた人に意義や手法などを伝える市民の存在が紹介された。

また藤さんが十和田市現代美術館(青森県十和田市)の館長を務めていた経験を元に様々な事例が紹介された。同美術館が地域にひらかれた「アートセンター」として成功を収めた理由として、(1)ビジュアル的にインパクトがある大きな馬のモニュメントを作ったこと。同美術館の屋外スペースと交わる官庁通りが「駒街道」として市民に親しまれているエピソードの紹介、(2)今までにない非日常の体験をつくったこと。同美術館は観光施設として建設され、通常は作品が日光の影響を避けるためにやらないが館内の6割は外からみえる設計にした。夜もライトアップして中の作品をみることができる、(3)年に数回、情報発信をポスターやチラシを通じて発信し続けたこと、(4)使っていない拠点をどう使うか考えたこと。人の流れをつくることが大事、(5)部活動をつくったこと。そのためには町を調査し、企画、発信していくコーディネーターの発生が重要であること、(6)コーディネーターの協力で、企業・デザイナー・

Archive&Report

Program

5

<価値を作る>

11.11 (土) 9:00-15:00

五城目を博物館に見立てるなら

浅利絵里子 (秋田県立博物館)

藤 浩志 (美術家・秋田公立美術大学副学長)

レポート

通期受講者 宮原葉月

作家らがコラボして商品開発をしたこと、(7) 展覧会をやっていくこと。事例として「花」、「建築」などテーマ毎に様々な切り口が生まれたこと、またそれらが町で蓄積していくことは重要であること、切り口が生まれた結果、日本酒を作り始めたり、そのための稲作を始めたりと活動が次々と派生していった事例がある、(8) 市民と関係をつくっていくアートが大事であること。事例として「10万本のまちばりをみんなで刺していく」アートが紹介された。

他にも町のおもしろい人に参加してもらったり、パフォーマーをつけたり、「箱」ではなく「旅」型のアートを企画したりする等、「予定調和ではなく、予期せぬ連鎖が大事」と最後に藤さんは締めくくった。



参加者から「五城目でも予期せぬ連鎖をつくっていくためにはどうしたらよいか」という質問に対して、藤さんは「五城目は歴史的に支配者層がいなかった地域。皆で楽しみながら調べていき、拠点(部活)をひらいてくことが大事。最初は小さく、少しずつ大きくしていくことがポイント」と回答。他にも同地で店舗を経営する参加者らと交えて意見交換がなされ、コミュニケーターの必要性が浮かび上がった。

上記プログラムに参加した個人的な感想は以下の通り。

目の前にあって当たり前だと考えている「今」が、50年後、100年後には確実に変わっていること、そしてそれらは「骨董」になりうるかもしれない、という発想に最初とてもびっくりした。

その思想に立ってみて、自分なら何を残したいと思うのだろう、何を後世に伝えていきたいのだろう、という視点を持つことができた。

Archive&Report

Program

5

<価値を作る>

11.11 (土) 9:00-15:00

五城目を博物館に見立てるなら

浅利絵里子 (秋田県立博物館)

藤 浩志 (美術家・秋田公立美術大学副学長)

レポート

通期受講者 宮原葉月

また、浅利さんの「五城目はまもなくダムに沈んでしまうので、短時間で自分の感性を全開にして、残したいものをいろいろな方法で記録してください!」という設定が面白く、私自身もハラハラしながら必死に調査することができた。いつもなら恥ずかしくてやれないが、飛び込みでお店に伺ってインタビューさせてもらうことができた。松月堂というお菓子屋さんでは、五城目の語源である「いそのめ」を使った「いそのめまんじゅう」の名前の由来や、明治時代から受け継がれている菓子組合の掛け軸の木箱を拝見させてもらうことができた。また日の出という床屋さんでは、江戸時代から続いている由緒ある床屋であること、またバリカンの刃やナイフなど、今は使われていないが貴重な品物を拝見させてもらえた。五城目の家々には代々伝わる大事な商売の道具や歴史がたくさん残っているのだろうと想像された。

また飛び込みでお店を訪ねた私たちを、追い払うこともなく受け入れてくださった店主の方々のご厚意が有り難かった。他プログラムで朝市インタビューをした際も感じたが、よそ者である自分を受け入れてくれる寛容さが五城目にあることを感じた。「AKIBI plus」の活動が少しずつ五城目という町に浸透しているのだと思う。これもコーディネーターの方々、そして同プログラム関係者の方々のご尽力あってこそだと思った。

今回が最終回であった。「第1回 畠山鶴松の落書き」、「第2回 大人のなべっこ遠足」、「第3回 『小さな問題』から捉える朝市」、「第4回 森を学び木を食べる」、そして今回の「第5回 五城目を博物館に見立てるなら」、と各回個性的なプログラムであった。とても面白く、時に知恵熱が出るような刺激を受け、今後の自分の生き方にも少なからず影響を受けたと思う。